

油津商店街は長さ約400m（そのうちの半分がアーケード街）。昭和40年代には、80店舗以上が並んでいたが、今ではその3分の1程度にまで減少している。空き店舗率も約6割に達するほどだ。そんな状況を打破するため、日南市は平成25年4月、「月額90万円！あなたの情熱で宮崎県日南市の商店街を活性化！」という人目を引くキャッチコピーで、油津商店街を再生する人材を全国から公募した。これは24年11月に認定を受けた「日南市中心市街地活性化

商店街再生の人材を公募

油津は宮崎県日南市の日南海岸沿いにある。天然の良港に恵まれ、40年ほど前まではマグロ漁船も盛んで、漁港にほど近い場所にある油津商店街も活気にあふれていた。しかし、マグロ景気が去ると、商店街は徐々に衰退。商店街にある店は一つ、また一つと閉店していった。日南市の人口は約5万5000人、油津地区だけでは5000人強。典型的な地方の小都市である。今、どこにでもある地方の小都市で、地域の特徴を生かした魅力ある商店街を復活させるために奮闘している人々から話を聞いた。

地元の人たちが育つ商店街、
自走できるまちづくりを目指す

油津商店街

宮崎県日南市

◀油津商店街振興会の吉川弘範会長（左）と「サボマネ」の木藤亮太さん（右）。「商店街内で新陳代謝ができる仕組みを考えていく必要があると思っています」（吉川会長）。「人口が少ないまちの商店街なので、あらゆる年代の人たちに来てもらえる商店街にしていきたい」と話す木藤さん



昭和40年ごろの油津商店街。肩と肩がぶつかり合うくらい混みあうこともあったという



◀すっかりシャッター街となっていた商店街

特集1 にぎわいを取り戻せ！ 商店街の挑戦

かつて人が集まりにぎわいを見せていた全国の商店街。しかし、今では人口減少、ヒトやモノの流れの変化、店主の高齢化などの要因が重なり活気が失われている。今号はそんななか、工夫を凝らし、まちなかににぎわいを取り戻そうと奮闘している人々をレポートする。

基本計画に沿って行われた施策だ。公募の役職名はテナントミックスサポートマネージャー（通称サボマネ）。応募条件は「採用後は日南市に居住」「4年で20店舗誘致」、その委託料として月90万円が支払われるというものだった。この公募について、油津商店街振興会の会長を務める吉川弘範さんはこのように振り返る。

再生のための組織が必要で、そのためには常駐して専門でやってくれる人が必要だと。行政側も商店街側も意見が一致したのです」この募集に対して、まちづくりの専門家など国内外から333人が応募。公開プレゼンテーションで「自走できる商店街づくり」を

